



# 子育て情報 11月

平成28年 11月  
椋山女学園大学附属幼稚園

## 愛着とイヤイヤ

園長 横尾 尚子

産まれたばかりの赤ちゃんの視力をご存知ですか？ 一般的には 0.01~0.02 ほどだと言われています。その視力で見える距離は、およそ 25 cm以内。抱っこしてもらった時に、ちょうどその人の顔がはっきり見える距離です。他はぼんやりとしてよく見えません。授乳やあやそうと抱っこされるその度に、赤ちゃんは、その人のキラキラ輝く瞳に吸い寄せられるようにその笑顔をじっと見つめ、大切な人物として脳に刻み込んでいくそうです。生まれ出たその時から、赤ちゃんは積極的に人との結びつきを求め始めているのですね。今回は、幼稚園入園前の赤ちゃん、乳児さんのお話です。

昨年度併設された椋山女学園大学附属保育園は、0・1・2歳児が入所する乳児専門の保育園です。大事にされているのは、健康管理、安心安全な保育、そして愛着形成だそうです。

心理学における愛着(attachment)とは、特定の人物(主に母親)と結ぶ愛情の「きずな」、情緒的な結びつきのことです。赤ちゃんが泣けば、すぐに駆け寄り抱き上げて、授乳やミルク・食事を与えたり、オムツを交換したり、話しかけたり。赤ちゃんが微笑めば、親(大人)も幸せな気持ちになって笑顔を返す。こうした情緒的な応答を繰り返しながら、母子間・親子間の愛着が形成され、強化されていきます。愛着の本質的要素は「守ってもらえるということに対する信頼感」。このような信頼感をベースとして、人は親子関係内外で社会性を発達させていきます。人生のスタートラインに立った赤ちゃんが「生まれてきてよかった」と思えるように、たっぷり手をかけて、子どもとの愛着関係を築いていきたいですね。

「愛着の形成」が乳児の健やかな情緒発達・社会性の発達に不可欠なものであると捉えられ、子育てや保育の中で大切にされている一方で、親や保育者を悩ませるものと言え、2歳児頃の「だだこね」でしょうか。この頃は「イヤイヤ期」とも呼ばれ、「イヤ イヤ！」の強情がつよく、子育てに時間と根気が必要な「タイヘン」な時期ではありますが、他では味わえない子育ての喜びを感じられる時期でもあります。

1歳半を迎える頃から、見えないものを思い浮かべる力「表象」が成立します。表象は爆発的な言語習得を促し、2歳頃の上下や大小などの概念の獲得、3歳頃の因果関係の理解へと、子どもの知的世界を広げてくれるのですが、困った事態も引き起こします。表象が成立する前なら、食べたがっているリンゴを目の前から隠せば、出されたミカンを喜んで食べてくれました。でも成立後は、見えなくなってもリンゴは頭の中に存在し続けます。だから「ミカン イヤ！リンゴ」と要求し続けて、周囲を困らせることとなります。さらにこの時期、「自我」が芽生えます。それまで、外からの働きかけに忠実に反応することで諸能力を開花させてきた乳児が、自分なりの意図をもった主体的な人間への第一歩を踏み出します。とにかく「ジブンデ」やりたいのです。自分なりの「ツモリ」や「ハズ」が育ち始め、自分の思うようにやりたいのです。しかし、そう全てが自分の思うようにやれる訳ではありませんし、やっていいこと悪いことが「しつけ」られる時期でもあります。こうして、「そんなことしちゃダメでしょう！」「イヤ！」の悩ましいやり取りが始まります。「イヤイヤ期」への対応の基本は「受け止めて周囲に目を向けさせる」です。「ダメ！」ではなく、「わかった。○○○したいのね」の受け止めから始めましょう。「受け入れられた」「認められた」喜びが、人とかわる力を育てます。まず、抱きしめて。お互いのぬくもりが、子どもにも大人にも心のゆとりをもたらします。